

小学校中学年社会科における社会参画意識の育成

— 価値判断や意思決定する場面を位置付けた授業づくりを通して —

加 藤 薫¹

小学校社会科における改善の具体的な事項として、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことが求められている。そのためには社会科学習の初期段階から、価値判断力や意思決定力を養うことが重要であると考えた。そこで、それらの力を養う場面を位置付けた学習指導過程と手立てを明確にし、自分の事として社会的事象を捉えることができる教材に着目した授業を行ったところ、よりよい社会を形成していくとする意識の高まりが認められた。

はじめに

「新学習指導要領」に基づく教育がスタートして三年がたとうとしている。社会構造の急激な変化に伴い、それに対応する力が強く求められているが、子どもや若者が社会とつながる力は、ますます弱くなっている感がある。例えば、高度情報化社会といわれるなかで、あふれる情報を処理しきれず振り回されている現状がある。目の前の子どもにしても、「調べ学習」の際にインターネットを用い情報収集をするが、集めることに終始してしまったり、大量の情報を持て余し放り出してしまったりといった様子が見受けられる。また、リアルな生活から学ぶことよりも、バーチャルな世界から学ぶことが多く、現実感覚が希薄になり、それに伴う社会や人との関わりの未熟さや弱さも見られる。「友達とうまく関われない」「相手の気持ちを想像することが難しい」などの困り感を抱えている子どもの相談も多く受けてきたが、その相談内容に年々幼さを感じるようになってきた。このような子どもたちの実態は、「生きる力」を育むことの難しさと大切さを端的に示しているといえる。

今、子どもたちは、他者の存在を大切にすることや社会との関わり方を学ぶことがますます必要になっていると考える。また、主体的に社会へ関わることで社会の中の自分を見つめ直し、自己肯定感や自己有用感を味わわせたいと強く感じる。このことは、平成20年1月中央教育審議会答申における小学校社会科学習指導要領改善の具体的な事項の一つに、「持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る」という文言で表れている。また、小学校中学年社会科の目標には「地域社会の一員としての自覚をもつようとする」とあり、小学校社会科の初期段階にこそ、これらの問題を解決する重要な役割があるのではないかと考えた。

研究の内容

1 研究の構想

これらの問題意識から、社会との関わり方を学ぶ一つのアプローチとして、小学校中学年社会科において社会参画意識を育むための授業について研究を行うこととした。

(1)社会参画の視点を取り入れた社会科授業

中央教育審議会答申を受けて、小学校社会科改善の具体的な事項の中で、社会参画の視点を取り入れた社会科授業が求められている。筑波大学の唐木(2010)は、社会参画の視点を取り入れた社会科授業を「1 科学的社会認識の育成を目指す社会科授業」「2 意思決定力の育成を目指す社会科授業」「3 社会的実践力の育成を目指す社会科授業」の三つにまとめ、1→2→3へと社会科授業を発展させることを提案している。特に、「社会的実践力」にあたる「提案・参加」を一つの到達点として重視し、それには、「科学的社会認識」や「意思決定力」の充実も必要であるとしている。本研究においては、この考えをベースとして社会参画の視点を取り入れた社会科授業を目指したいと考える。

(2)社会参画意識と価値判断・意思決定

社会参画意識とは、「よりよい社会を形成していくことと行動する思いや考え」と捉える。児童がこの社会参画意識を持つには、自分と社会とはつながっており、自分も社会の一員であるという大前提のもと、社会的事象を自分の事として捉え、その上で「よい社会」についてのイメージを持てるようになることが必要である。では、社会参画意識を育成するための具体的な要件は何か。本研究では、それを「価値判断」と「意思決定」の能力と規定した。

まず「価値判断」であるが、児童が自分なりの「よい社会」をイメージするためには、身の周りの様々な社会的事象を分析的に処理し、個々の情報を価値付けを行っていく必要がある。その上で、それらの情報を用いて「よい社会」をイメージしていく。この段階を「価値判断」の段階とした。唐木が言うところの「科

1 小田原市立富水小学校
研究分野（授業改善推進研究 社会）

学的社会認識」である。ただし、中学年の児童の価値観は、社会的事象に対して他人事であったり、独り善がりであったり、その場の思い付きであったり、きれいごとであったりすることがある。そこで、なるべく多くの他者の価値観に触れさせ、今ある価値観に搖さぶりをかけることで、児童が自らの価値観そのものを見直し、広がりや深まりのある価値観を持てるように配慮した。

次に「意思決定」である。社会参画意識では、前述の通り、ただ思うだけではなく「行動する」ことが重要なポイントとなる。行動するためには、自らの手元にあるいくつかの「よりよいもの」や「できること」を分類・整理し、これだというものを決定する必要がある。そこで、「意思決定」とは、個々の思考を行動に移すことを表明する段階とした。さらに言えば、ここでの行動は「よりよい社会を形成する」ためのものである。よって、個人だけではなく多くの人の意思決定も想定しなくてはならない。他者の価値観や考えを互いに尊重し合いながら、整理し、調整し、すり合わせ、皆が納得できる解を求め、合意を形成する力を養うことが不可欠であるといえる。

このように価値判断をし、意思決定した「自分たちの思い」を実社会に向け提案し、具体的な活動に参加することで、中学年の児童は社会に参画しているという実感を得ることができる。同時に、自分たちで下した決定だからこそ責任ある行動が求められるという自覚が、自らの考え方や行動を見直させ、さらに社会参画意識が高まっていくことも期待できる。

以上のような論に基づき、本研究の研究仮説を設定した。

社会科学習初期段階である小学校中学年において、自分の事として社会的事象を捉えることができる地域教材を用い、価値判断や意思決定する場面を位置付けた授業を行うことで、児童の社会参画意識を高めることができる。

2 研究の方法

価値判断や意思決定する場面を位置付けた授業づくりを行うために次の四つの視点を持ち、単元構成と指導の手立てを考え、検証授業を行った。

(1) 四つの視点と指導の手立て

ア 社会的事象を自分の事として捉えさせる

価値判断・意思決定する場面を位置付けた授業をするためには、社会的事象を児童が自分の事として捉えられるようにすることが重要である。そこで、児童にとって「身近で切実な問題」について考えさせた。また、単元を通して社会的事象を俯瞰的な視点から構造的に捉えられるようにした。

イ 他者の存在に気付かせる

児童が自分なりの価値観を持って判断できるようになるためには、他者の思いや考えによって今ある価値観が揺さぶられ広げられるという経験が必要である。そこで、「様々な人の本音を聞く活動」を取り入れ、自らの価値観を見直す機会を設けた。

ウ 自分なりの考えを持たせる

知識・理解を深め、学習してきたことをいかしながら価値判断し、自らの意思決定につなげるため、自分なりの考えを持つことに重点を置いた授業づくりを考えた。

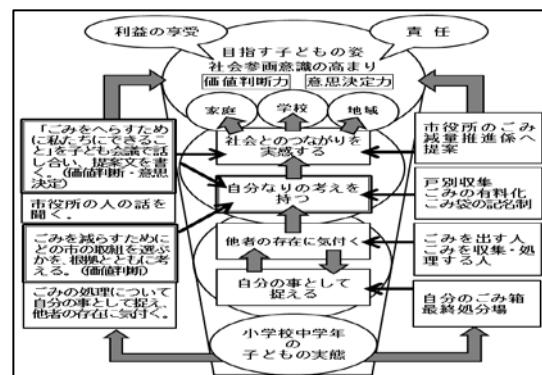
そこで、価値判断する場面として、いくつかの答えがある中で、公平性のある判断基準に気付きながら話し合い、自分なりの答えを選択できる授業方法を考えた。また、意思決定する場面として、合意を形成する方法を体験させることを意図したグループでの話し合い活動を取り入れた。

エ 社会とのつながりを実感させる

実社会への提案を通じて、一人ひとりの思いを社会に反映させる体験は自己有用感につながる。同時に、そのためには一人ひとりの責任ある行動が必要であることも感じ取らせたい。そこで、児童の意思決定のプロセスの中で得た多くの気付きを土台として、実際に社会へ提案していく単元構成とすることで社会参画の実感を伴った学習となるようにした。

(2) 単元構成

(1)のア～エの四つの視点を踏まえ、「持続可能な社会の実現に関わる学習内容」を研究構想に当てはめることで価値判断・意思決定する場面を位置付けた単元構成を考えた。本検証授業では、「廃棄物の処理」の単元から次のような単元構成図を作成した（第1図）。



第1図 単元構成図 4年「廃棄物の処理」

3 検証授業

(1) 検証授業の概要

【実施期間】 平成25年10月9日～11月8日

【対象】 小田原市立富水小学校

第4学年 1学級 33名

【单元名】 「どうする？！私たちのごみ箱」

【学習指導計画】

第1図から、第1表のように学習指導計画を立て、

価値判断・意思決定する場面を第8時と第10・11時に位置付けた。

第1表 価値判断・意思決定する場面を位置付けた学習指導計画

時	価値判断・意思決定する場面を位置付けた授業の流れ	主な学習活動
第1時	自分の事として捉える ↓ 他者の存在に気付く	・パッカー車とごみステーションの写真や学級のごみを見て、ごみの量や種類に関心を持つ。 ・家庭から出るごみの量や種類を計算して記録を立てる。
第2時		・ごみを出している人にハイタッチして「参加していただきて、ごみの量や種類についてパネルディスカッション形式でそれぞれの考え方を聞く。」
第3時		・ごみを出している人の考え方ワークシート①にまとめる。
第4時		・小田原市のごみの量のグラフや最終処分場の問題の提示から、「ごみを減らすにはどうしたらいいか?」という学習問題を提起する。
第5時		・ごみ処理の方法や分別りサイルについて調べ、ごみを収集・処理する人の考え方を予想するとともに、見学の視点を持つ。
第6時		・環境事業センターの見学を通して、調査・インタビューを行い、ごみの処理のしくみを知るとともに、ごみを収集・処理している人の考え方を知る。
第7時		・見学を通して、分かったことを発表する。 ・いろいろな立場の人の考え方をワークシート①にまとめる中で、分別のルールが守られていない現状について話し合う。
第8時	価値判断する場面	・「ごみを減らさなければ、三つの市の取組のどちらの市のごみの出し方を選ぶか」について話し合い、価値判断をして、自分の考え方を持つ。(ワークシート②に自分の考えを選んで書く。)
第9時	自分の事として捉える 他者の存在に気付く	・市役所の人の話を聞き、小田原市民の一員として「私たちにできることは?」という問題意識を持つ。
第10時	価値判断・意思決定する場面	・「ごみを減らさなければ、私たちにできること」を考え提案するに子ども会議を開く。 【子ども会議の流れ】 1. 会議に子どもを書き、個人用シート(ワークシート③)にまとめる。 2. グループ別で、ワークシート④を利用して、それぞれの考え方を分類・整理する。 3. グループ用シートを活用して、合意を形成してグループで意思決定をする。 4. グループの案を学級全体へ提案し、承認を得る。
第11時	価値判断・意思決定する場面	・各自で提案文を書き、単元の学習のまとめをする。 ・小田原市の環境政策課ごみ減量推進係へ提案文を送る。
第12時	提案(参加)	・各自で提案文を書き、単元の学習のまとめをする。

(2) 学習指導の実際

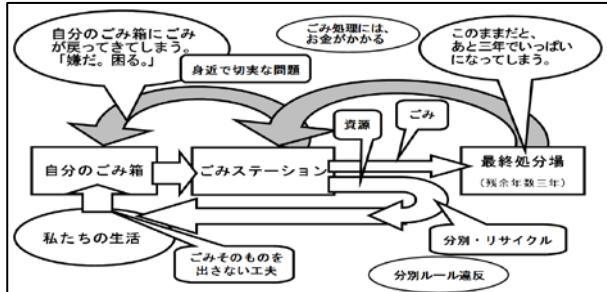
ア 自己の事として捉え、他者の存在に気付く段階

【第1時～第7時】

この段階では、単元を通して児童が「自己の事として捉える⇒他者の存在に気付く」ことを繰り返していくことで、今ある価値観を少しづつ広げていけるようにした。その手立てとして次の二点を考えた。

① 「身近で切実な問題」を構造的に捉える工夫

本検証授業で扱った「廃棄物の処理」の単元では、児童に次のような「ごみの処理」における構造（第2図）に気付かせていくことで、「身近で切実な問題」を自己の事として捉え続けられるようにした。



第2図 「ごみの処理」における構造

第2図の網掛けの矢印は、「最終処分場があと3年でいっぱいになると、出したごみが自分のごみ箱に戻ってきててしまう (=ごみが出せなくなる)」という児童にとって「身近で切実な問題」の部分を表した。

② 様々な人の本音を聞く活動

パネルディスカッションを行い、ごみの処理に関わる様々な人の意見を聞く場を設定した。その際、パネリスト（家人・技術吏員さん・商店の店長さん）には、ごみ処理で困っていることなどの本音を語っていただき、「きれいごと」ではない様々な考え方や問題があることに気付いていけるようにした。

イ 価値判断・意思決定する力を養う段階

【第8時】

第8時の学習は価値判断する場面として位置付けた。児童が今ある価値観を広げて自分で判断・選択することができるよう、「①学習課題の設定」「②課題解決的な学習方法」「③指導の工夫」の三点を意識して、授業を展開した。

① 自己の事として捉えるための学習課題設定

第7時までの学習の後に、自己の事として捉えられる内容として、「ごみを減らすために、どのようなごみの出し方をすればよいか」について考えさせた。戸別収集する方法（A市）、ごみ袋を記名制にする方法（B市）、ごみを有料化する方法（C市）の三つの市の取組を提示し、「ごみを減らすために、自分が住民だとしたらどの市の取組を選ぶか」という学習課題を設定した。

② 児童が自分で判断するための選択形式の話し合い

はじめに、A市・B市・C市のごみの出し方を提示した。次に、学習してきたことを踏まえ、「どの市のごみの出し方がよいか」を選び、その根拠をワークシートに書かせた。その後、学級全体で意見を交流し、友達の考え方を踏まえた上で、もう一度よりよいと思う考え方について根拠を明確にして各自に考えを持たせた。

③ 児童が自分で判断するための指導の工夫

自分なりの根拠を持ってよりよい取組を選ぶためには、公平性のある判断基準が必要である。今回取り上げた各市の取組は、どれも「ごみを減らす」ことにつながる取組である。同時に、様々な人の意見を取り入れると、長所も短所も出てくる取組でもある。そこで、判断する際の基準を「いろいろな人の立場に立って考える」という点におきながら話し合いを進めた。

ウ 提案・参加につなげ社会参画意識を高める段階

【第9時～第12時】

この段階は、様々な人の考え方や社会的事象を根拠に、価値判断・意思決定する場面として位置付けた。ここでは、児童が合意を形成するなどして、グループで意思決定ができるように、「①学習課題の設定」「②課題解決的な学習方法」「③指導の工夫」の三点を意識して、授業を展開した。

① 自己の事として捉えるための学習課題設定

第9時には、小田原市役所のごみ減量推進係の方を招き、市のごみ処理の現状・取組・課題について話していただいた。その中で「市民の一人として、ごみを減らすためにできることを考えて提案してほしい。」と呼び掛けさせていただくことで、自分たちの考え方を社会へ提案するという方法があると気付かせるようにした。

そして「ごみを減らすために私たちにできることを考えて提案しよう」という学習課題を設定し、「子ども会議」を開くことにした。

② グループで意思決定をするための「子ども会議」

第10・11時の学習のねらいは、グループでの話し合い活動を通して、合意を形成する方法を体験させることである。そこで、次のような学習の流れで「子ども会議」

議」を行った。

【「子ども会議」の流れ】

- 付箋に考えを書き、個人用シートにまとめる。
- グループ用シートを活用して、それぞれの考えを出し合い分類・整理する。
- グループ用シートを活用して、合意を形成してグループで意思決定をする。
- グループの案を学級全体へ提案し、承認を得る。

ここでは、グループでの話し合いを価値判断・意思決定する場面として位置付けた。児童の実態を考慮して、よりよい考えを自分たちで選ぶために分類・整理する場面と、グループで意思決定をするために合意を形成する場面に分けて段階的に話し合った。

③グループで意思決定をするための指導の工夫

分類・整理する場面では、価値判断・意思決定するためのグループ用ワークシート(第3図)を活用した。

このワークシートの表の縦列には、ごみを減らすためにしてきた四つの項目を入れた。また横列には、「自分一人で」「友達と一緒に」「大人と一緒に」という項目を入れることによって、社会参画を意識し、学校・家庭・地域へ反映させたい考えを自分たちで分類・整理することができるマトリックス形式の表にした。

また、合意を形成する場面では、分類した表を振り返る時間を確保した。児童は、次のように付箋や分類した表の意味を考えていった。

- 重なっている付箋(意見)
 - みんなが考えた重要な考え方
- 一枚の付箋(意見)
 - 一人しか思い付かなかつた特別な考え方
- 表に空欄がある。
 - 誰も考えなかつた所なので、課題となる部分かもしれない。

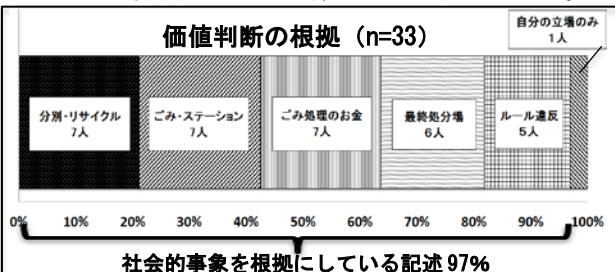
このように一つ一つの意見を大切にすることで、友達の考えを排除することなく、よりよい考えを選んだり、考えと考え方を結び付けたり、新たな考えを出し合ったりする話し合いをさせ、グループの提案を一つに絞り、グループで意思決定をさせた。そして、児童の提案を市役所のごみ減量推進係へ提出した。

4 結果と考察

(1)価値判断・意思決定の基礎力の育成

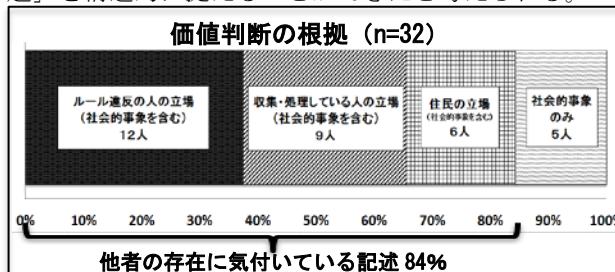
ア 第8時

第8時の価値判断する場面を位置付けた授業において、第1時～第7時までの学習をいかして、どのような事柄を判断の主な根拠としているかワークシートの記述を基に分析したところ第4図のようになつた。



第4図 第8時のワークシートによる分析①

97%の児童が「自分の立場のみ」以外の「ごみ処理にかかるお金」「最終処分場の残余年数」「ルール違反」などの「ごみの処理」における構造(第2図)で気付かせてきた「社会的事象」を判断材料にして記述していた。のことから大半の児童は「身近で切実な問題」を構造的に捉えることができたと考えられる。



第5図 第8時のワークシートによる分析②

また、「社会的事象」を判断材料とした児童の84%は、第2・3時に扱った「様々な人の本音」を踏まえ、「いろいろな人の立場に立った」記述をしている(第5図)。のことから、社会的事象を自分の事として捉えながら、他者の存在に気付く段階において、「身近で切実な問題」を構造的に捉えさせるとともに、様々な人の本音を聞く活動を取り入れたことで、価値判断・意思決定するための基礎を整えることができたと考えられる。

第8時の手立ての有効性については、A児を例に検証する。「ルール違反の人の立場」に立って考えたA児は、はじめ、「ルール違反をする人がいるから、戸別収集するA市にしてごみを減らした方がよい」という考えであった。しかし学級全体での意見交流後、ルール違反をしてしまわないように燃せるごみ袋と燃せないごみ袋の二種類が有料であるC市の取組に選び直した。ルール違反をしてしまう人の気持ちも考えて、罰則として考えるのではなく、どうしたらルールを遵守してもらえるかという考えに至り、価値観を広げ自分なりの判断をして選ぶことができたといえる。また、考えを変えなかつた児童においても、学級全体の意見交流を通して、より根拠を明確にして選ぶ姿が見られた。

以上のことから、第8時において、自分で選ぶ根拠を明確にさせ、公平性のある判断基準に気付かせたこ

とは、社会的な見方を広げるとともに、価値判断力の基礎を身に付ける上で有効であったと考えられる。

しかし、「自分の立場のみ」で判断しているB児は、戸別収集のA市を選んだ理由が「自分の家の前にごみをすぐおけるからいい」と記述している。学級全体での意見交流後も「やっぱりA市の方がいちいちごみをごみステーションを持って行かなくてすむから」と記述していた。そこで、このB児については、その後の姿を観察した。

イ 第10・11時

約20分間で一枚の付箋に一つの考えを書き、個人用シートに貼らせた。どの児童も学習してきたことや自分の生活との関わりから意欲的に書く姿が見られた。また、付箋の内容では、個人用シートの四つの項目から書いているものが多く、その効果が表れている。

個人用シートの四つの項目と児童の付箋の記述（一部）

- 「ごみそのものを出さないようにする工夫はあるかな？」
・裏紙を使う・壊れた物は直して使う・残さず食べる・水筒を使う・着られなくなった服をゆづるなど
「どうやったら分別できるかな？」
・分別箱を作る・ルールを守る・紙をまとめる・ごみ袋に名前を書く・ごみを捨てる前に考えるなど
「どうやったらリサイクルできるかな？」
・給食の牛乳パックのリサイクル・リサイクルができるかを考える・段ボールコンポストなど
「どうしたら協力したり、広めたりできるかな？」
・市民にアンケートをとる・ポスターを作る・ごみステーションに段ボールコンポストを作る・学校でごみ減量推進委員会・「ごみを減らす週間」など

B児は、20個もの考えを付箋に書くことができた。第8時では、学習したことをいかして考えることが難しかったB児であったが、付箋に短い言葉で考えを書くことによって、第9時までに学習したことから多くの考えを持ち、書き出すことができたといえる。ふだんは、学級やグループの話合いではほとんど発言しないB児であったが、「子ども会議」では、付箋を手がかりに自分の考えを友達に伝えることができた。また、付箋と表を使って視覚化し、友達と一緒に考えを分類・整理することで、自身の思考も整理できたようである。第12時に書いた学習感想「ごみ日記」には、次のような内容を記述している。注目した点には下線を引いた。

第12時におけるB児の学習感想「ごみ日記」の記述

わたしは、市役所の人についてあん書を書きました。ごみをへらすためにわたしたちにできることは、ダンボールコンポストをやったり、そのかんばんを作つて町の人に見てもらうこと書きました。なぜかというと、生ごみがリサイクルできますすごいなと思ったからです。わたしたちのていあんが使われるといいなと思いました。

この記述から、B児にとっても、価値判断・意思決定する場面を位置付けた授業は自分の考えを根拠とともに述べるために基礎力を高める上で有効であったと考えられる。

また、前述しているA児は、単元のはじめから問題意識が高く、知識も豊富で理解力がある。しかし、学習経験が生活場面での実践に結び付かないことが課題である。そこで、他者との関わりの中で集団としての意思決定をする力の基礎が実社会への参画意識につながっているかを確認するために、このA児が所属するグループの「子ども会議」を分析した。

A児の個人用シートには14枚の付箋が貼られ、学習したことだけではなく、様々な視点から学校や地域社会へ投げ掛けていくアイディアが書かれていた。

グループでの話しにおいて発言力が強くなりがちなA児であったが、付箋や分類した表の意味について考えたことで、一人ひとりの考えを大切にしながら合意を形成しようとする姿が見られた。また、A児がこのように他者（友達）との関わりを考えて話し合えたことで、グループのメンバーの、互い



第6図 A児所属の
グループ用ワークシート

に質問をしたり、似ている考え方や違う考え方などを線で結んだり、空欄箇所についての他の考え方はないかと考えたりする姿が見られ、ワークシートの活用が効果的であったといえる（第6図）。

以上のことから、「子ども会議」において、価値判断・意思決定するためのワークシートを活用し、合意を形成する話し合いをさせたことは、集団としての意思決定力の基礎を身に付ける上で有効であったと考えられる。

(2)社会参画意識の高まり

A児のグループでは、はじめ、「ポスターを作る」「ごみのことを放送で教えてあげる」などの社会へ広めていく内容が話し合いの中心であった。しかし、分類・整理した表を振り返り、合意を形成する場面では、「ごみそのものを自分たちが出さない工夫をすること」に論点が焦点化され、「物を大切に使う」という結論に至っている。

第12時におけるA児の「提案文」の記述

ごみをへらすために、私たちにできることは、物を大切に使うという案が出ました。なぜなら、物を大切に使えば、紙やえんぴつ、消しゴムなどいろいろなものがごみにならないと考えたからです。

これは、市役所への提案というよりは宣言のように思えるが、「ごみを減らす」ということを自分の事として捉えているからこそ、自分の身近な生活に立ち返った提案文となった。また、A児が書いた学習感想には、

第12時におけるA児の学習感想「ごみ日記」の記述

私は「子ども会議」で自分の考えを出すときに、大きく二つのことを考えました。「自分でできること」と「自分だけではできなく、みんなで協力しなければできないこと」です。そこから考えたことは、やっぱり自分でできない。みんなと協力して初めてごみがへってくると思いました。

と、記述されていた。この記述からA児は、「子ども会議」において、話合いの内容と話合いの方法の両面で、他者と関わることの大切さを感じることができたといえる。さらに、次のように続けて書いている。

私は、もう一つやってみたことがあります。それは、家族のごみのすべてをしっかりと見て、注意をしてきました。なぜかというと、紙ごみなどをしっかりと分別をしてごみが少しでもへると思ったからです。それをためした結果、いつも出す生ごみの量は指定ふくろの約二分の生ごみでしたが、一つのふくろの分だけになりました。

この記述から、問題を自分の事として捉え直すことによって、A児の思いや考えが家庭での実際の行動につながったといえる。他者の存在に気付くなかで、最後にもう一度自分の事に立ち返り考える姿は、社会参画意識の高まりの表れだと考えられる。

最後に市役所へ提案文を届けたところ、「段ボールコンポストを広める取組など実行できることを共に考えたい」と前向きな回答をいただいた。そのことによって、児童のごみ減量に対する意識が学習後も続いている。学級では、ごみ減量推進実行委員を中心となって、給食の残菜を段ボールコンポストで堆肥化したり、その残菜の量を生ごみの減量分として記録したりして提案内容の一部を実行している。

また、市役所への提案から約一か月後に保護者へのアンケートを行ったところ、家庭では次のような会話や行動の変容が見られた。

保護者アンケートの記述

- ・ごみについて勉強してから、ごみを捨てる時に、「これは燃せるごみ?」「プラ?」と聞くようになり分別を意識するようになりました。
- ・段ボールコンポストを楽しんで毎日しっかりと分けています。きちんと分別する姿もよく見られます。(A児の保護者)
- ・実行まではできていませんが、「段ボールコンポストがしてみたい。材料は市役所でもらえるんだって。」と話していました。ごみのことに限らず、ふだん、物や資源を大切にしようとする気持ちが表れています(水道や電気についてなども)。改めて、大人も考えさせられた良い機会になったと思います。(B児の保護者)

これらの児童の会話や行動の変容は、市役所への提案を単元上の到達点としたことによって、児童の身近な生活場面（特に、家庭や学校）にも転移が起こり、社会参画意識の高まりが認められたと考えられる。

5 研究のまとめ

本研究を通して、児童が「自分の事として捉える⇒

他者の存在に気付く」ことを繰り返し学習していくなかで、自分なりの価値観を広げ、もう一度自分の価値観を見つめ直す姿が授業の様々な場面で見られた。はじめは、社会的事象に対して他人事であったり、思い付きであったりした中学年の児童の考えが、他者の考えに触れる事によって揺さぶられ、「よりよい考えを提案しよう」という確かな思いとなり、その思いを地域社会まで広げていったことは一つの成果である。

さらに、児童はそれにとどまらず、単元の最後にもう一度自分の事に立ち返って考えていった。学習後の家庭での会話や行動の変容は、社会の中でごみを出している自分を見つめ直し、個々の児童が自ら「自分にできることは何か」を考えて意思決定した姿である。児童が価値判断や意思決定する力の基礎を身に付けることによって、授業から離れたところでも、社会参画意識を高めていったことは研究の大きな成果である。

これらのことから、子どもと社会との関わり方を考えていく上で、「もう一度自分の事に立ち返って考えること」が重要であると分かった。そのことによって、自分にとっても社会にとってもよりよい考えを生み出そうとする姿勢を形成できるとともに、子ども自身が社会とのつながりを実感することができるからである。

おわりに

検証授業前後に、社会科学習に対する意識調査を行った。授業前には、「好き」「少し好き」と回答した児童は70%だったが、授業後は94%となり大きく増加した。このことは、価値判断や意思決定する場面を位置付けた学習を通して、児童が社会参画の意識を持ち、地域社会の一員として自己有用感を味わえたからだと考える。本研究を基に、今後も実践を積み重ねることで、社会科学習が本来持っている楽しさを味わうことができる子どもを育てる一助となればと考える。

引用文献

中央教育審議会答申 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p. 80

参考文献

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編』 東洋館出版社
- 唐木清志・西村公孝・藤原孝章 2010 『社会参画と社会科教育の創造』 学文社 pp. 22-26
- 波 嶽 2010 『小学校社会科 よりよい学習指導案から よりよい授業実践へ—社会に参画する授業づくりの実践技術と理論—』 東洋館出版社
- 長谷川康夫 2002 『教科書を豊かに発展させる授業 社会科 問題意識から学びを深める』 学事出版